

琉球大学学術リポジトリ

甘藷しゅくが（縮芽）病の除去法

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-05-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 島袋, 俊一, Shimabukuro, Shunichi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19574

ばならないと痛感した。

六、去る五月十二日名護町に発生中の豚伝染病流行状況を見る機会を得たが、同方面は一般が豚伝染病に対する防疫対策に理解があり、又熱意を有する地帯であるが一部に畜舎の不潔が見受けられ豚伝染病の巣くつとなり例年の発生の源をなしているのではあるまいかと思はれる豚舎を見て心を寒くした。

次に名護町は肉豚の集散地の観があり移動が激しい為に予防注射もれの豚がつねに相当数あつて此等が発生の際のつと伝

甘藷しゆくが(縮芽)病の防除法

甘藷に色々の病害があつて、品質を損じ、風味を悪くして経済的なたてを受ける事実はふんだんに見られる。

特に沖縄のように連作するところではそれが著しい。ところが関心きわめてうすく、殆ど何等の対策も払つて居らぬ現状である。飼料として食料として甘藷栽培がとゞけられるかぎり少しでも生産をたかめねばならず、病害対策も徹底して行ふ必要がある。

宮古の多良間島に甘藷のテング菓が発生して、島民の出稼ぎを余儀なくせしめたのは最近起つた周知の事案である。右の外甘藷には、黒斑病、黒あざ病、蔓割病、しゆくが病等が例年発生をくりかえして多大の損害を与えている。

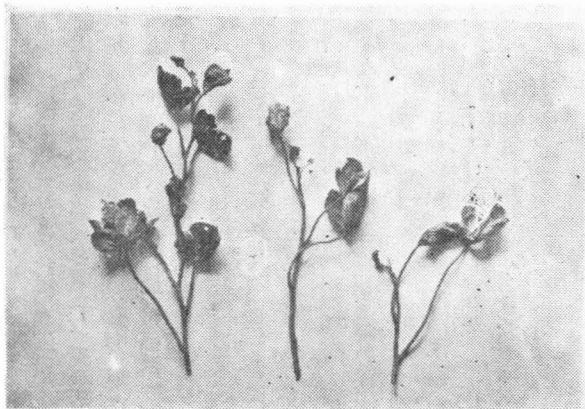
今回はしゆくが(縮芽)病についてのべる。

一、どんな病徴を現わすか。

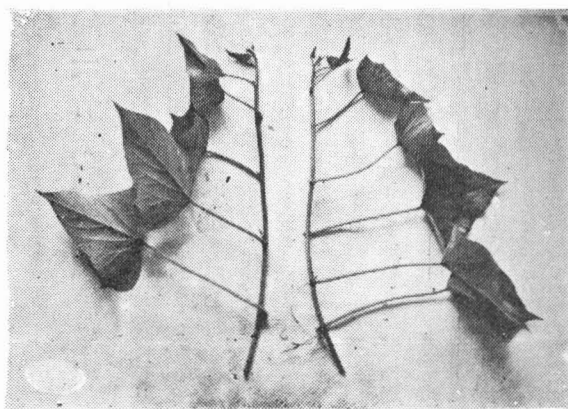
極めて著しく変形するので直ぐに見分けられる。即ちいも蔓の新芽の部分が、葉と共に縮れてくる。もう少しくわしくのべると、葉にあつては、主脈(葉の中央を通るすぢ)の伸びが悪くその形がアサガホの貝われ葉(発芽のとき最初に出る葉)に似てくる。大きさは健全葉の三分一から五分一位となり、葉面

染病におかされてさらに新鮮な強力な病毒をまきちらす源となり次期発生の拡大をもたらすものと考へられた。同町は特に交通の中心地で此処での発生は東部へ或は全部半島へ或は更に北部へ又は養豚地の中南部へと伝播を来す心配もあるのでつとめて各自の或は隣組のなほひろくは全球の養豚家の安全をはかるために未注射豚を受けた場合は是非駐在の畜産技術員に連絡して予防注射をして貰ひ養豚業の円滑な経営と発展をきし度いものである。(つづく) (宮城 正 夫)

はしわが出来て、キクラゲのようになる。葉の色もあせ、ひど



しゆく芽病にかかった若い蔓。老葉は侵されがたい。



健全葉。しゆく芽病にかかった蔓と比較してください。

くなると枯死する。いも蔓は直立して地面に這はなくなる。被害葉の裏面を見ると、特に葉脈や葉柄に、灰かつ色の細長い大小不同の病斑がある。この病斑は他の部分より少し凹んでいてあばた状をなして居り、カサカサした粗な感じがする。新芽はほとんど生長を止め、形も小さくなる。若い蔓の部分には葉柄に現われるのと同様の病斑が出来る。かように栄養分をつくる葉や新芽が侵されるのであるから、芋の取量の著く減ることとは十分にうなづかれる。時に極無のことがある。

二、何日、どんな処に発生するか

本病はもとも執事性のカビの一種によつておこる病であるから、温度高く湿度の多いところ、またそう云う時期に発生する。分布を見ると、南は台湾から沖縄を経て奄美大島にいたり十島村宝島に終つて居る。それ以北の鹿児島県下には発見されていない。昨年八月宝島で目撃したところによると本病発生の時は防霉剤無に近く削蝕どしとなり、極めておそれられているよ

うである。因に同島では本病のことを「サバー」と称している。油蘆においては全土に発生するが、なかなしく無肥料栽培の畑に多い。年中見られるが激発期は夏である。六月の適期植を俾すことを忘れてならない。

三、どうして本病を防ぐか

イ、本病の芋蔓から絶対に苗を採つてはならない。本病の伝播は主として被病蔓から飛散る胞子によるのであるから、病苗を植付けることは恰も病気の種子をまきちらすのと同じである。健全畑より採苗することによつて著しく発生を低下せしめることができる。

ロ、被病蔓に出来た芋を種蒔に使つてはならぬ。六島で研究したところによると、かゝる種いもから出る蔓は必ず糸病すると云ふ。つまり藪を通して伝播すると云ふ。

ハ、苗の消毒に六斗式ホルド液を使い、これに三〇分間ほどつけて水洗後植付け。

ニ、抵抗性品種の問題、即ち本病にかゝり難い若くは全然かゝらない品種があるかどうかと云う点については研究が十分でない。経路若の声をきいて貰いたい。本学でも研究する計画である。

(島袋俊一)

竹の栽培 (一)

経済局の調べによると、一九五四年における琉球の竹材輸入金額は四二五万余円となつており、今迄の琉球における竹材の使用数量はバナナ、パイナップル等の果実や蔬菜類の出荷需用、砂糖糖用等と漸増が予想される。経済局では竹材需要量を砂糖糖用二〇万本、出荷需用七十五万本、釣竿其の他五万本の計一〇〇万本を見込んでおり、地元消費の建築用、棚掛け用、物干用

其の他等を合せると莫大な竹材が必要で、以上の竹材量を生産する為には集約に経営されて単位面積当り生産数量の遙かに多い日本における竹林の生産数量から計算しても五〇〇町歩以上の竹林が必要となるが、現在全琉球の竹林面積はその一割にも足りない。世界の竹類の分布は熱帯地方が面積の大半を占めており、特にアジアの季節風地帯では竹の生育はよいことになつており琉球も気候的には竹林栽培の適地である。

お隣りの日本本土では一般の竹林栽培はもとより、河岸での竹林造成によつて頻発する洪水の被害を最少限度に喰ひ止める一方、竹材の増産にも寄与してゐる。台湾に於ても一般の竹材生産林や農地や宅地の周辺の防風林としての竹の栽培は広く行われてゐる。

一、竹の特性

竹はすばらしく生長の早いもので、タケノコとなつて地上へ伸び出してから幹が太さや高さの生長を終つて以後太りも伸びもしなくなる期間は竹の種類や生育する場所の気候の相異等によつて多少の差はあるがマダケやモウソウチク等の大竹種は二五—一五〇日、ホテイチクやクロク等の細竹種は二〇—三三〇日、南方産大竹種のマチクは六〇—七〇日となつてゐる。一般的に生長の期間は南方産の竹、大竹種、細竹種の順に短くなるようである。又竹は老衰をして使ひものにならなくなる期間や利用に適する期間も甚だ短期である。すつかり老衰して枯れかゝる年令は大竹種が一〇年、細竹種が五—六年で、又伐採利用に適する年令は大竹種が三—五年細竹種が二—三年でそれ以上の老竹は病害におかされたり、変質したりして利用価値が低くなる。繁殖は地下茎からタケノコを出して行い、若くて太くて多数の細

根をつけた、いきいきとした卵黄色の地下茎は太いタケノコを数多く発生するので竹苗に適する。

地下茎は年々伸び広がつていき、その各節には多数の細根を発生する、一方多数のタケノコをも出してその下方にも多数の竹の根を発生して土からまり合つておるので水害や土砂の崩壊を喰ひ止める力が大きく、水害防備林や土砂防止林等に造成されてゐる。竹が四、五年で伐採利用が出来、数十日で一定の姿と大きさを完成し、根を無数に拡げて養分を吸収するので、たいの土地には青竹、つきつきに地下茎を伸ばしてそれからつきつきにタケノコを発生生育する等の諸性質は竹材の生産や利用、竹林を造成して水害防備や土砂防止や防風に役立て、たいの土地には竹林造成をして土産生産的に使用し得る等大変都合の有用植物である。

二、竹の適地

然し竹も場所や栽培法の適否によつて林の姿や、竹の大きさや質や生産本数、毎年の新竹発生本数等に大きなひらきがあるので適地を選んで植え付けて竹の特性によくあつた栽培法によつて優良竹林に仕上げねばならない。

風当りの強い所、急傾斜地、表土の厚さが二〇種以下の浅地、日射の強い南—西斜地、乾燥のひどい砂地、水の停滞する所等は竹を折損したり土壌が乾燥し過ぎたり過湿であつたりして竹の生育がよくない。峯通りや中腹以上の風当りの強い山地、石やこいしのあるところしてゐる土地、海岸の砂地、背風の低い雑草の繁茂地や常時水が溜つてつちちくした所はさける。

一般に地形の関係で風当りも弱く表土も割に深い山のふもとと一帯、風当りの弱い森林内やその風下の一帯、河岸の流出土砂の堆積地帯、部落内の空地や宅地等に適地が多い。栽培面積がある程度まとまり立竹密度も適当であれば一部の林縁竹が防風林の効用をつとめるし、竹が日射の射入を緩和して林内環境がよくなり竹の生育もよくなるので意情のゆるす限りまとまつた面積の栽培をおすゝめしたい。